

秋田屋本店が輸入拡大

ミャンマー産蜂蜜

養蜂・食品製造の秋田屋本店(岐阜市加納富士町、中村正社長)は来年、ミャンマーからの蜂蜜輸入を本格化する。これまで年間200ト程度だった輸入量を5倍の約1000トに拡大。新設した本巢工場などで日本市場に合う品質に均一化し、飲料や蜂産医薬品の原料として使用する。(久松孝志)



ミャンマーの養蜂場で作業する現地の男性
=同国シャン州(秋田屋本店提供)

来年5倍に 中国産より低コスト

現在、国内蜂産品の約9割が輸入品で、多くが中国に依存している。だが近年、中国国内での蜂産品の需要が高まり価格が高騰。加えて円安もあって同社は「ポストチャイナ」を検討してきた。

浮上したのがかつて研修生を引き受け、約25年前から取引、技術指導もしているミャンマーの協力工場。ミャンマーからの農産品は一般の関税率よりも低い税率(特惠税率)が適用される。蜂蜜の場合、中国産が25・5%に対してミャンマー産は0%。安価で輸入できる価格メリットがある。

同社は11月、ヤンゴ

ン市内の協力工場や郊外にある蜂産採取する蜜源も視察し、蜂蜜量を確保できることを確認した。来年、現地駐在員1人を派遣し、日本式の高品質な製造技術指導を続ける方針。

本格輸入によって同社の蜂蜜のうち、ミャンマー産の割合は20%程度まで上がる見込み。中村社長は「現地の政情も改善し、安定した製品を見込めるようになった。中国と違って環境汚染のリスクもない。価格での優位性を生かしたい」と話している。

2013年12月28日(土) 岐阜新聞